「子の祝福を祈る」

民数記６：２２－２７
マルコの福音書１０：１３－１６
November.10.2024

（第一、第三礼拝）今日は幼児祝福礼拝ということで、第二礼拝で幼児祝福式があります（した）。
満２歳児から満５歳児の子供たち１６名が前に出て来て、名前を呼ばれた後、皆で心を合わせ子供たちの祝福を祈る時を持ちます（した）。
第一礼拝と第三礼拝では子供たちはいませんが、祈ることは出来ますので、祈りたいと思います。　私が祈りますので、心を合わせていただけますと感謝です。

祈り

民数記６：２２－２７
マルコの福音書１０：１３－１６（パワポ）

Preface

今朝は幼児祝福礼拝なので、いつものエペソ書ではなく、今読みました聖書箇所から、子供たちを祝福することについて考えていきたいと思っております。

私たち今こうして聖書を手にしておりますけれども、聖書が何故に書かれ、何故に残され、何故に世界各国の言葉で翻訳されながら、世界のベストセラーとなって、数多くの人々の手に渡って行ったのか。
国が滅び、民族が滅び、記録した言語まで忘れられても、決して廃れることなく、むしろ、さらにより多くの人々の手に今も渡り続けているのか。
その理由をひと言で言うならば、「神が人を祝福したい」と思っておられるからです。
聖書は、何か特定の宗教の教典でもなく、神学という学問をするための道具でもなく、何かこう理解しにくいややこしい教えを説くややこしい教本でもなく、ただひとつ、「幸いになって欲しい、祝福のうちを何としても生きて欲しい」と願っておられる、人類への神の愛なる思い、恋文だと思います。

「子どもを祝福する」ということを覚えながら聖書の御言葉を黙想していますと、「生まれて来た子供が祝福のうちを歩むことを当然のように願う私たち人間の親心は、人をお造りになられた父なる神様が起源なんだ」ということが、心のうちに思い浮かんできました。
人をご自分のかたちにお造りになられた父なる神様は、この地に生まれて来た人々、一人一人が祝福のうちに歩むことを願っておられます。
そして、その祝福を、私たちの営みの中から生まれて来た新しい命、幼子たちに、親たち大人たちは、主なる神の名で求めること、祈ることを求められていま

す。
　神様は、祝福を求める私たちの祈りを用いて、私たちの祈りを通して「祝福したい」と、「祝福する」と思っておられるということです。

「祝福」と表現されるもののすべては、すべて神と繋がっている、神との繋がりの中で起こる、与えられる、体験する、感じるものだということを覚え、覚えたならば、それを次の世代に伝え、祈ること。
　祝福の源は、神であられることを忘れないこと、認識すること、記憶し続けること、「神の名において祝福を祈ることこそが祝福の大前提なんだ」と、「祝福そのものなんだ」ということを伝え、祝福するよう神さまは求めておられます。

Part One

　民数記６：２２－２７の言葉をもう一度読んでみたいと思います。

民数記６：２２－２７（パワポ）

　神さまがイスラエルの民たちに、神の民スラエルに連なるすべての次世代、子どもたちのために祝福を祈るよう、主の名において、主なる神様のうちにあって祝福を祈るよう要請しておられます。

　この民数記６章の祝福の祈りもって、子どもたちの祝福を祈るよう、お父さん方に勧めている教会があります。
　「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔を向け、あなたに平安を与えられますように」と、主の名を子どもたちに上に置いて、お父さん方が子どもたちのために祈るのです。

　子どもたちの祝福を願わない親はいないと思います。
　ただその祝福は、主なる神様に求めている祝福なのか、主が御顔を照らし向けて下さるという祝福なのか、主が平安を与えて下さることを願っている祝福なのか、それとも、世が教える祝福なのか、人が唱える祝福なのか、私が願い思い描いている祝福なのかが、この祈りを黙想しながら、考えながら、神に語り掛けながら、神から語り掛けられながら祈るならば、何をもってその子の祝福としているのかが、祈り手自らの中で示されていくでしょう。
　「神に繋がることを祝福としているのか」、または、それ以外の、「自分が祝福だと考えるもののために、『それが与えられるように』と、神に願掛けをしているのか」が、この祈りを祈ることをもって示されて行くように思います。

　神から要請されているこの祝福の祈りから、私たち大人が、親が教えられる第一のことは、子どもたちの祝福は、主なる神様に祈ることをもって成し遂げられるということです。

そして、副産物として与えられることは、子どもたちの祝福を祈ることを通して、祈っている大人や親自身が、何を祝福と思いながら生きているのかが示されるということです。

私が卒業した韓国合同神学大学院のＯＢの牧師先生が牧会しておられる教会が話題になっているということを知り、その牧師先生のお証を聞いたことがあるのですが、何がその教会で起こっているのかと言いますと、子を持つたくさんのお母さん方が集っているというのです。

日本のニュースでも流れたりすることがありますが、韓国の大学受験は正に受験戦争で、日本のそれよりも激しく、受験を控えた高校生を持つお母さん方が、子どもたち以上に不安に駆られて、子どもたちの受験が上手く行くようにと、困った時の神頼みのように教会に来て祈り始めたというのです。

その様子を見た牧師先生は、「いやまあ祈るのはいいけど、受験祈願のためだけに祈りに来るのは、神社仏閣じゃあるまいし、どうなのかなあ」と悩まれたのですが、「しばらく様子を見てみよう」と思ったそうです。

すると、同じように子どもの受験のことで悩み心配し、一生懸命に子どもの合格を祈るお母さんたちが一人二人と増え始めました。

そして、お母さんたち同士が、その悩みや不安を分かち合いながら、一生懸命に神さまに合格祈願をしたそうです。

すると、いつからか、お母さん方の祈りが変わり始めました。

神さまに我が子の大学合格を熱心に祈っていると、「果たして、この祈りが叶えられたところで、子どもにとって、それは幸いなことなんだろうか？　それが全てなのだろうか？　この祈りを神さまは望んでおられるのだろうか？　これが本当に我が子のためを思っている祈りなのだろうか？」と祈りを通して、祈りの内容を自らが吟味するよう導かれ、祈りが変わっていったというのです。

合格祈願を祈っていたお母さん方が神さまに触れられ、変えられていく様子に、その牧師先生は、変に人をさばくパリサイ人のように、安易にお母さん方を心のうちでさばいていたことを悔い改め、感謝を献げるようになりました。

お母さん方自らが思い描く祝福を祈っていたら、「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように」と、「神の名を子どもたちの上に置くことが、子どもたちにとっての本当の祝福なんだ」と気付かされていったというわけです。

それから、その教会は、「どなたでも自由に、子どもたちの受験祈願のために祈りに来て下さい」と宣伝するようになって、同じような経験をしたお母さん方が新しく来られるお母さん方を助けながら、結果的に神に出会い、イエス様に出会い、救われる方々がたくさん起こされるようになっていきました。

「面白いなあ」と思いました。

何だっていいから、とりあえず、神さまに祈る。
熱心に祈る。
すると、聖書の神さまはあわれみ深く、いつくしみ深く、私たちの弱さや痛みに同情出来ないお方ではないので、ちゃんと祝福へと導いて行って下さる。
とりあえずでも、切羽詰まった自分なりに考える祝福でも、ご利益でも、主なる神様に祈るならば教えて下さり、導いて下さる。
私たちの予想を遥かに超える懐の深さが、父なる神様の属性でもあることに気付かされます。

この話を伺って思わされたことは、先ずは私たち、子どもたちのために何だっていいから、とりあえず主なる神様に、イエス様に祝福を祈ることの大事さでした。
何はともあれ、そこから祝福が始まるということです。
そこから、神の祝福が始まるということを教えられました。

Part Two

始めに読みましたもう一つの聖書箇所、マルコの福音書１０章には、「とりあえずご利益でもあれば」という風にも見えなくもない、イエス様に触れて頂こうと、人々が子どもたちを連れてきたことが記されています。

ところが弟子たちは、その見え透いたご利益祈願のように見える姿が気に食わなかったのか、または、単に子どもたちが嫌だったのか、彼らを叱りつけます。
するとイエス様は、逆に、弟子たちを叱りつけました。

マルコの福音書１０：１３－１６（パワポ）

イエス様は子どもたちを抱き、手を置いて祈り、祝福されました。
どんな祝福でしょうか？
事故や災いから守られること、病が癒されること、物質的経済的に豊かになること、試験に合格する事、物事に勝利すること、道が開かれること、物事に勝利すること等々、「この地で生きていく上でこうだったらいいなあ」と思う希望や願望も含めていると思いますが、それ以上の祝福をイエス様は祈られました。

「祝福」という言葉ですが、世間一般的に言う「祝福」という言葉から連想されることと、聖書が私たちに教える「祝福」とは根本的な違いがあります。
もちろん、私たち世間一般で考えられている「祝福」と、聖書の言う「祝福」には重なる部分もあります。
先程言いましたように、事故や災いから守られること、物質的に祝されること等々も、「祝福」という言葉を用いて聖書は表現していますが、それが「祝福」の本質・本体ではないことを聖書は教えてくれています。

使徒パウロがピリピ書４章で告白していますように、貧しくても、乏しくても、袋小路に思えるような所にあっても、または、富んでいても、満ち足りていても、どんな境遇にあっても満足出来る根拠となるものを頂くこと、これを聖書は、究極的に祝福と言います。
じゃあ、その祝福の根拠となるものとは何なのか？
もう一度、イエス様の言葉を見てみたいと思います。

マルコの福音書１０：１４－１６（パワポ）

「神の国はこのような者たちのものなのです。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることは出来ません」と仰りながら、子どもたちを祝福することをもって、イエス様はここで、神の国と祝福を同等に位置付けられました。
つまり、神の国を受け入れること、神の国に入ることこそが祝福であり、この地上においても、どんな境遇にあろうが満足出来る根拠だということです。
イエス様は、この祝福の本質である神の国を子どもたちが受け入れることが出来るようにと、子どもたちを祝福致しました。

当然ながらイエス様は、子どもたちにとって何が一番大事なのかを誰よりもよくご存じでありました。
神の国です。
神の国こそ、子どもたちにとって最も大事なものですね。
神の国という祝福が、子どもたちにとって最も大事なものです。

なのに弟子たちは、そのことが良く分かっていなかったようです。
「神の国については、大人になってから！　まだまだ神の国について知る前に、やるべきこと、知るべきことが沢山あるでしょ！　子どものくせして神の国について知ろうなんて、５０年早いは！」と思ったかどうかは良く分かりませんが、そこまで思ったんじゃないだろうかと思ってしまうほどに、弟子たちは、子どもたちをイエス様のところに連れていくことを拒み、怒り、邪魔までしました。
邪魔までしたんです。
「イエス様の弟子だ」と自負している彼らが、あたかもサタンの手下でもあるかのように、子どもたちがイエス様のところに行って、神の国という祝福を受けることを邪魔までしました。

弟子たちが思っただろうことを私たち風に言うならば、「いやいやまだイエス様についてとか、教会についてとか、礼拝についてとか、聖書について知る前に、勉強して、運動して、合格して、就職して、家庭をもって・・・、そういうね、世の中をより良く生きて行く上で必要な条件を整えてからでも十分間に合うから、今は大丈夫！」といったところでしょうか。
または、「霊的なことについては、もっと世の知識を採り入れてからでも遅く

ないし、もっと世間一般のルールや常識や知見をたくさん身に付けてから、神のことでも、霊的なことでも関心を持ったらいいよ」といったところでしょうか。
　でもそんな風に思っている人々に、イエス様は仰います。

マルコの福音書１０：１４（パワポ）

　私たち大人が子どもたちに対して最低限出来ること、または、やらなければならないことは、子どもたちがイエス様のところに行こうとすることを、またはその機会を奪ってもいけないし、妨げてもいけないということです。
　ご利益を求めてでもいいから、とりあえず、イエス様の所に連れて行くこと。

　なぜならば、イエス様のところに行くことが、イエス様のところに行って神の国を受け入れることが、大人たちばかりか、子どもたちにとっても唯一無二の祝福だからです。
　子どもたちの祝福を願うならば、必ずやイエス様のところに連れて行かなければならず、イエス様の懐に抱かれる必要があるからです。
　イエス様を通してでなければ、祝福の根拠である神の国を受け入れることも、入ることも出来ずに、ありとあらゆる境遇の中で、その一つ一つの境遇にいちいち右往左往し、満ち足りることも出来ず、満足することも出来ず、何をしても不安で、不満で、空しくて、心底喜べなくなってしまうからです。

　譬え、事故や災いにあっても、病にあっても、思い描いた道でなかったとしても、「神の国に入れるんだ」という信仰のある人生は、それすべてが恵みとなり、益となり、感謝となり、祝福となります。
　逆に、大きな事故や災いに会うこともなく、大病を患うこともなく、意外と思い描いたような、人から羨ましがられるような人生を歩めたとしても、神の国という祝福が伴わない人生ならば、祝福の人生とは言えなくなってしまうでしょう。

Part Three

　ルカの福音書１６章を見ますと、イエス様がこのことを明瞭に示すために、究極的な明暗がくっきりと分かれた両極端な二人の人物の話をします。

ルカの福音書１６：１９－３１（パワポ）

　死後のことを語りたがらない、知りたがらない、重きを置かない、そんな雰囲気の中、キリスト者でさえも、天国よりもこの地での宝を願ってしまうような困難な時代を生きていますが、あれも手に入れ、これも手に入れ、あんな物も食べ、こんな物も食べ、あそこにも行き、ここにも行き、あんな人にも出会い、こんな人にも出会い、あんな所にも住み、こんなところにも住んだとしても、それが、神の国にあってのものでないならば、最終的な究極的な祝福にはなり得ません。

イエス様は真剣ですね。
神の国という祝福に与ることと与らないことの深刻さについて、真剣にお語りになります。
神の国という祝福に入ることには、早すぎるという事はありません。
いやむしろ、早ければ早いほど良いでしょう。
早ければ早いほど、掴みどころのない、答えのない、満たしのない空しい人生ではなく、神の国を生きる人生となりますね。
行く道すべてにおいて、主なる神様を知れる祝福を味わわせて頂くこととなるでしょう。

日本に初めてキリスト教を伝えたフランシスコ・サビエルのことを日本史の授業で皆さんも学んだことと思いますが、あのフランシスコ・サビエルがこんな有名な言葉を残しました。
「子どもが７歳になるまで私に預けなさい。その後は、あなたが、その子にしたいようにしなさい。」
この言葉を基にして、世界中の多くの教会は幼稚園を運営するようになりました。
そして、子どもたちの心に神の国を抱いてもらうよう努めてきました。
本来、幼稚園の務めは、子どもたちに、大人が決めた教養を身に付けさせることとか、英才教育を施すこととかではなく、神の国という祝福を子どもたちの心に植えることです。
その心に神の国を抱けば、あとのことは自然とついて来るようになっていると、聖書は教えてくれています。

申命記２８：１－１５（パワポ）

人の上に立つとか、物事に勝利するとか、経済的に豊かになるとか、所謂、神を信じようが信じまいが、すべての人が願望している祝福さえも、まことの神、救い主イエス様にどうつながり続けるのかに掛かっていると言います。

あまりにも私たち人間、神さまの言うことを聞かないので、馬の目の前にぶら下げたニンジンのように、祝福の項目を私たちの目の前にぶら下げて下さりながら、神に繋がり続けること、神の国を生きること、神の与える本当の祝福に留まり続けることの重要性を「これでもか」と説いて下さいます。

「子どもが７歳になるまで私に預けなさい。その後は、あなたが、その子にしたいようにしなさい」というような言葉を自分なりに解釈し利用して、または悪用して、世の中に初めて社会主義独裁政権国家をロシアに樹立させたレーニンは、「私に４歳までの子どもたちを預けなさい。そうすれば、私が彼らに植えた種は、一生涯決して引っこ抜かれることはないだろう」と言いました。

日本語には、「三つ子の魂百まで」という言葉がありますが、この言葉の持つ真意と信仰的適用を、今私たちこそ真剣に、深刻に考えて行かなければならない言葉ではないかと思うんです。

Part Four

私は生まれた時から、幼い私のことをイエス様に触れていただこうと、イエス様のところに連れて行ってくれる大人が周りにはいませんでしたので、神の国という祝福について知ることもなく２０歳まで生きました。

そういう中で育まれた結果、私の人生の目標は、お金持ちになることと女性にもてるようになることとなりました。

この二つのことを叶えることが、私の人生を Happy にしてくれ、楽しいものにしてくれると思っていましたし、この二つのために、物事を成したいと思っていたと言っても過言ではないぐらいに、そのこと以外の当時の私にとっての目標と言いましょうか、人生の目的はありませんでした。

そのことが、この世界においてすべてであるかのように思っていたこと、その程度のことしか神のお造りになったこの素晴らしい世界に見出すことが出来なかった霊的視野のない肉の人でしかなかったこと。

またもし、そこで終わってしまっていたら大変なことになっていた、祝福の本体を知ることも、味わうこともない、人生における真の大損害と結末を被った人生になっていたかもしれないということを思い返した時、身震いするような気持ちと共に、感謝でしかありません。

真理ではない真理のようなもの、成功ではない成功のようなもの、命ではない命のようなもの、愛ではない愛のようなもの、自由ではない自由のようなもの、笑いではない笑いのようなもの、平和ではない平和のようなもの、そして、神ではない神のようなものが、私たちを幸せにしてくれると、命を豊かにしてくれると、繁栄を約束してくれると言われ続け、教え続けられている世界。

それらのものの前に立つと、心が揺れ、誘惑を受け、魅力を感じ、その力は相当なもので、それらの偶像は、まかり間違うと、本当に私たちに命と繁栄をくれるものだと錯覚してしまうような世界。

そうして、そんな壊れた世界に置かれた、壊れた私たち。

唯一まことの神の代わりの神のようなものゆえに、息が詰まるような思い。

そこからの解放が神の国であり、救いが神の国という祝福です。

そして、その祝福を知っている者として、一刻も早く子どもたちに伝え、知ってもらう使命を神様から委ねられているのが私たちです。

Conclusion

インターネット物販の世界最大手企業アマゾンの創設者ジェフ・ベゾスさん

へのインタビュー記事にこんな内容がありました。

　ベゾスさんに会う人会う人皆が、同じ質問をするということでした。
　どんな質問かと言いますと、「この先１０年の間、変わっていくことは何でしょうか？　変わるものがあるならば、それは何でしょうか？」という質問です。
　その質問の意図は、「この目まぐるしく変わる世界にあって、上手く適用し、成功を収めたい」ということなんだと思います。
　ベゾスさんのその質問に対する返答はこうです。
　「その質問自体が間違っています。　本当に大事なことは、変化すること、何が変わるのかを知ることではなく、何が変わらないのかを知ることが重要なのです。」

　変わらないものを知ることがなぜ、そんなに重要なのか？
　変わらないもの、１０年後も２０年後も変わらないものを知れば、未来を予測しながら、確信をもってその未来将来に備えることが出来るからですよね。
　ベゾスさんは続けて言います。
　「アマゾンの物販に関わる顧客たちの過去１０年、いやこれからの１０年２０年後にもずっと変わらない要望に、その二つのことに集中したので、私は成功を収めることが出来ました。
　流通業界における変わることのない顧客の二つの要望は、早い配達と安い価格です。」

　ここから教えられることがあります。
　それは、それさえも変わるということと、この世界がどんなに変わったところで、決して変わらないものがあることを私たちは知っているということです。
　父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体の神と、この方の御言葉です。
　マラキ書３：６の御言葉、「主であるわたしは変わることがない」、イザヤ書４０：８「草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことばは永遠に立つ」とある通りです。

　今、私たちが子供たちしてあげられる最大のことは、決して変わることのないお方について知ってもらうこと、そして、その方の言葉を蓄えて上げ、植えてあげることです。
　変わるものに翻弄される人生ではなく、変わることのないお方、神の国、祝福に生きる人生のために祈り、実践していきましょう。

　お祈りいたします。
　祝祷：民数記６：２４－２６